

# 武蔵野文化協会ニュースレター

## 文化財を地域の宝に～歴史文化を活用したまちづくりを目指して～（参加記）

令和6年(2024)12月1日(日)飯能市市民会館小ホールにて、同市作成「飯能市文化財保存活用地域計画」の文化庁長官認定記念シンポジウムが開催され、同計画の周知徹底及びその発展・活用を図る活発な発表と討議がなされた。先に同計画の概要説明が行われた後、記念講演として本会会長坂詰秀一氏(立正大学特別栄誉教授)による「大名関係墓所の保存と活用～観光考古学の視点から～」が行われた。

坂詰会長の講演は、1 文化財の保存・活用の新展開、2 観光考古学の創出と方向、3 飯能・大名墓の観光考古、の三点からなされた。まず、平成31年(2019)の改正文化財保護法の理念及び観光ビジョンのニーズ、特に改正力点として、文化財の保存・活用は「地域を見据えた」ものであり「観光活用」の提示であることが指摘された。従来からの文化財の記録・保存より、さらにブラッシュアップし理解を深化させて活用を深めることにより、文化財をより有効な地域資源へと高めていくことの必要性が説かれ、そこから見た飯能市計画の高評価、計画具現としての取り組みへの期待が述べられた。次に、観光考古学の理念・定義の点より、調査研究対象である「地域の歴史遺産」の保全・活用、その歴史的価値の詳細な理解の必要性、そこから「地域の宝」、すなわち「歴史資本」「文化資本」として価値付けることが地域の主体性によりなされることが指摘された。「地域の歴史遺産」の保全・活用において、得てしてその歴史的価値が看過されがちであること、歴史的価値を明確にするために徹底される調査により「地域の宝」の存在は周知される等の指摘は極めて重要である。人々の生活は無限の内容を有し、遺跡・文献を対等とする詳細な理解、その背景・意味付けが絶対必要となる。「地域の歴史遺産」及び「地域の宝」の活用方法として創出されたのが観光考古学であるが、単なる保存に止まらないその活用には、地域が主体的に考えていくことの重要性が説かれた。そして次に、墓所は時代の世相を示し、また故人の生前様相を示す重要な史跡であること。そこから、飯能市の近世文化財を代表する水戸藩付家老中山家等の大名関連墓所は「地域の宝」である対象として、全国的にも類をみない大名墓として極めて重要であり、今後の整備調査・エンジニアリングの必要性、そして同画計の基礎として史跡の分布図・マップの作成がなされて見学の動線が定められる等、同市の保存活用への積極姿勢の評価がなされた。

パネルディスカッション「徳川家に仕えた付家老家の墓所～飯能の近世大名墓所を読み解く～」においては、水戸藩付家老中山家の他、尾張藩付家老竹腰家・成瀬家、紀伊藩付家老安藤家・水野家の徳川御三家付家老についての墓所の説明が、それぞれ地元の詳細な専門家のパネラーによってなされた。御三家付家老について個別の詳細な説明に加えて相互比較することによってより緻密な論議がなされ、飯能の水戸藩付家老中山家の墓所の歴史的評価がより明確にされることとなった。

このうち、松原典明氏(石造文化財調査研究所代表)によって尾張藩付家老竹腰家・成瀬家についての説明・発言がなされた。名古屋市千種区の両家菩提寺は戦後同市の復興計画によって都市計画墓所である平和公園に改葬移設され、近世景観等の詳細な検討は困難とされたが、墓標・文献調査より得られた内容で墓所との比較検討が述べられた。竹腰家の初代付家老正信は、母お亀の方が家康側室として藩祖・徳川義直を儲けたことで異父兄として義直の後見となる。母菩提寺の相應院が歴代葬地となり、以降、母と正信の墓標形式が選択されたが、のみならず尾張家の象徴的な墓標形式としても認識され継承された。一方、成瀬家は初代付家老正成が日光家康廟傍に埋葬され、菩提寺・白林寺等には正成の業績を讃える頌徳碑が造立されたが、あくまで墓所の石造物は墓標ではなく碑である。しかし、竹腰家・水戸藩中山家と同様に、初代が象徴的に祀られている点での造立の理念的な共通性が指摘された。このような藩祖・遠祖からの祭祀の方法・スタイルの踏襲、そのアイデンティティ・顕示とその理由については注目される。また、中山家墓所については、歴代保存はビジュアル的には通常の域であるが、家族墓等の併設、考古学以外の分野からの視点においてその価値は極めて大きいとの指摘がなされた。

シンポジウムは、全体的に僅か約3時間という短い時間ながら、盛り沢山の内容であった。坂詰会長の記念講演はこれもまた約1時間という限られた時間ながら詳細を極めつつも、かつ明快な論旨であり、またパネルディスカッションの報告内容も細部にわたる興味深い内容で、まさに今回の計画内容の通り論議が「歴史的価値を明確にするために徹底」された観があった。今後とも、「地域の宝」を極める、さらなる調査・研究の進展が期待される。  
(長島一浩)

## 武蔵野文化協会

ウェブサイト <https://musashinobunka.jp>